

第3回学校環境適正化検討委員会会議録

- 一、日 時 令和5年1月30日(月) 午後3時00分～午後4時30分
- 一、場 所 金浦公民館 2階 軽運動室
- 一、出席者 本間 徳之、伊藤 和明、石船 清隆、佐藤 健、佐藤 真二郎
武内 隆之、宮崎 絵理、伊藤 兼壽、佐藤 玲、佐藤 佑介
大須賀 博、阿部 道、村上 道夫、佐々木 誠、小笠原 愛美
檜岡 一英、横山 英弥、阿部 徳之、伊藤 剛喜、佐藤 直哉
三浦 順子、熊谷 洋、齋藤 隆、見山 謙一郎
(計24名)

- 一、事務局 教育長 齋藤 光正、教育次長 畠山 真姫子
教育総務課長 今野 和彦、学校教育課長 菱刈 宏記、
教育総務班 班長 佐々木 真紀子、主査 齋藤 沙織、
主任 竹屋 昭宏

●佐々木班長 ただいまより、第3回学校環境適正化検討委員会を開会します。はじめに、齋藤教育長よりご挨拶申し上げます。

●齋藤教育長 はじめに、約半年も入院してしまい、この検討委員会にも出席できず大変ご迷惑をお掛けしました。本当にすみませんでした。心よりお詫び申し上げます。そこで日頃からこの検討委員会に対する想いや願いを3つの視点から申し上げます。

まず1つ目は、これまでの推移であります。これまでのにかほ市の小中学校の適正化については、平成21年度2月に出されました、学校教育将来構想策定委員会の提言を受けまして、私たちは進めて参りました。その提言の基本的な考え方は、複式学級を解消するというものであります。この提言を、教育委員会は市民の声、つまり民意として重く受け止め、それに基づいて、小出小学校の複式解消のために平成27年度に院内小学校と小出小学校の統合を進めました。そして平成30年度に、上郷小学校と上浜小学校の複式解消のために、象潟小学校、上郷小学校、上浜小学校の統合を進めて参りました。そのあとの構想については議会の一般質問でたびたびありました。その度に私は、こんな風に答えておりました。これからの構想については、仁賀保地域、金浦地域、象潟地域という旧町単位の捉え方ではなく、まちづくりの一環として検討していくのだという構え

を取らなければなりません。そのために、第2次にかほ市総合発展計画後期基本計画に基づいて、総合的な視野から、5年以内に提言並びに基本的な方針を固めるためにこの委員会を設立しました。

大きな2つ目ですが、過去に学ぼうということです。昭和の大合併では、仁賀保地区、院内地区、小出地区を合併し、旧仁賀保町をつくりました。その時に3地区の一体感を持つために、平沢中学校、院内中学校、小出中学校を統廃合し、新生の仁賀保中学校を新設しております。当時の平沢中、院内中、小出中は統廃合する必要がないほど多くの生徒がおりました。それにもかかわらず、なぜ中央に仁賀保中学校を建てたのですか、建てようとしたのですか、と当時の議員の方、役場の方に聞きました。それに対して、このように答えられました。合併すれば、行政と市民の一体感が大事にされることは当たり前のことです。ですが、その一体感を持って取り組まなければならないのは、教育も同じという捉え方をしました、とのことです。つまり、旧仁賀保町の子ども達をどのように育てていけば良いのか、仁賀保町を支えていく子ども達をどういう環境で育てたら良いのか、という視点から戦略を立て統合を進めた、という話でした。その考え方は仁賀保町だけでなく、象潟地区も同じでした。象潟地区も象潟中学校、上浜中学校、上郷中学校の3校を統合しようと考えたようです。しかし、上浜地区が反対したために、上郷中学校と象潟中学校が統合し、新生の象潟中学校が建てられたということであります。私が言いたいのは、この昭和の大合併時の一体感については今も学ばなければならない視点の一つである、と強く感じたことです。

3つ目は、今皆さんが色々な話をしながら提言をなさろうとしていますが、実際に市として、市の教育委員会としてどのような構想を持っているのかということが気になるかと思われまます。そこで私の方から、市並びに教育委員会がこのような構想を持っているということをお伝えします。ただ、構想ですのでそれが全てではありません。それをもとに皆さんで提言を考えていただければありがたいです。国立社会保障・人口問題研究所がまとめた将来推計人口によりますと、2040年にはにかほ市全体で1つの小学校、1つの中学校の規模になるという風に推計されておりました。したがって、児童生徒の数がどのように推移するかを見極めていかないと、市全体の構想についての作成は難しいと考えているところです。しかし、考えているだけではいけないため、これからの適正化について2つのことを大事にしていく必要があると私は思います。

1つ目は地方創生、2つ目は一体感です。この地方創生と一体感の視点で考えていかなければならないということを、議会でも議員の皆さんに申し上げてきました。地方創生という視点から考えますと、学校は本来、地域社会の輪であり地域社会を構成する重要なパーツの1つであります。そのため地域社会の意向を反映し、地域社会とリンクし、地域社会に貢献できる人材を育てることが学校

の責務であります。その視点から、地域に学校を残すという戦略を進めていくことも大事ではないかと思えます。また、一体感という視点から考えますと、先ほど過去に学ぶというところで一体感の必要性を述べましたが、その一体感を持って取り組まなければならないのは、やはり教育であります。そのために、市全体で旧仁賀保町から学んで、にかほ市として、これからのにかほ市を支えていこうとする子ども達をどのように育てていけばよいのかという視点から、統合という戦略も進めていくことが必要ではないかと思えます。つまり、市の構想としては、地方創生という視点から、各地区に1つの小学校を残していきたいということがひとつです。それから、一体感という視点から、中学校を一つにしたいということでもあります。ただ、地方創生、一体感のどちらかに絞るということではなく、この2つの視点の両面から進めていき、にかほ市がもつ豊かな自然や歴史、文化等の多様な資源を最大限活用し、人間として身につけておきたい基礎・基本、周りを活かして人を育ていける人間性、厚い壁にあたっても、少しでも乗り越えていく根気強さ・我慢強さ、感謝・優しさ・思いやりに富んだ豊かな心、そういったものを身につけた子どもを育てていきたいです。そして、自信と誇りを持って、にかほ市を語れること、にかほ市に生まれてよかった、住んでいられてよかった、これからもずっと住んでいきたいと思えることを、そして、にかほ市をどこにいても支えていきたいと思える、そういう豊かな心を持つ子ども達を育てていきたいと、そのためのより良い環境を私たちが考えていかなければならない。それが私たち大人一人ひとりの責任であり、使命ではないかと私は思います。

最後に、委員の皆さんにお願いをします。

- ・少子化の時代であっても教育環境を充実させ、小中学校の質を高めませんか。
- ・幅広い視点から再編、整備構想について具体的な方針を示していきませんか。
- ・少子化は今後も続きますが、地域の衰退、学校の統廃合、人口減少が負のスパイラルに陥っていくことがないようにしていきませんか。
- ・常にマイナス思考ではなく、プラス思考に物事を考えませんか。
- ・21世紀後半を見据えた希望を語れるという計画にしていきませんか。

とお願いし、あいさついたします。委員の皆さん、ご難儀をかけますが、どうぞよろしく願いいたします。

●佐々木班長 ありがとうございます。それでは、議題3 案件に入ります。ここからの進行は伊藤副委員長にお願いいたします。

●伊藤副委員長 案件1) 小中学校の現状についてのご説明を、象潟小学校の佐藤先生からお願いいたします。

●象潟小 佐藤校長 象潟小学校の現状についてご説明します。先ほど教育長のお話にもありましたが、象潟小は上浜小、上郷小と統合して5年目となります。統合時は旧学区意識が強かった、と聞いております。小さな小学校からの統合となり、学校に適応できなかつた子どももいたようです。現在は、旧学区の発言はなくなり、どこの地区だからどう、ということはありません。子どもの中には前の小学校の方が良かったということをする子もいますが、現6年生が3つの小学校に入学した最後の学年となります。来年度の新入生から全員が象潟小学校入学者となります。象潟小学校には白百合、ひまわり、小砂川、明星、星城の5つの保育園から入学してきます。入学当初は、園児の数の少ない保育園から入学する子どもは不安がるという申し送りが保育園の方からあったりしますが、同保育園出身児でも異学年と仲の良い子もいますし、初めのうちは2年生が1年生の世話係として、朝の登校時にお世話をしてくれるので不安を取り除くようです。

児童数に関しては、昨年度全校で380名いましたが、今年度は10名減少して370名、学級数は4年生が3学級、他は2学級、特別支援学級が2学級です。来年度は、4年生の2名が転出となるため5年生は2学級となり、特別支援学級は1学級増で、合わせて13学級です。人数はまた10名減の360名となる見込みです。

私は今から20年以上前に仁賀保中に赴任し、16年間務めました。当時は金浦、象潟と言えば少し荒れていたイメージがありましたが、象潟小学校に赴任した昨年、象潟の子はとてもかわいい子たちでした。しかし、学力と学習意欲は少しずつ改善傾向にあるものの、依然課題となっております。県の学習状況調査によって、勉強は大切・将来に役立つように勉強したい、と答えている子が100%近くいるのですが、勉強が好きという質問については県平均を大きく下回っている状況です。これについては、前回の検討委員会で話題に挙がった、人数の少ない学級は目が行き届くということが関連していると考えます。我々も目を配っていないわけではありませんが、実は今年度4月に先生の1人が病休にはいりました。通常であれば、休んだ先生の代わりに講師があてがわれるのですが、講師がおらず、本来算数の授業に7年部（1～6年生の学級担任以外）の先生が教えに入ったり、習熟度別で学級を2つに分けたりしてやる予定だったのですが、それもできず、7年部が担任になったりしていたことも、学習状況調査の悪い要因になっているのではないかとも思っております。さらに、思いやりにかける言動からのトラブルが結構あります。前回の委員会での院内小学校の説明では、自分には良いところがある、の数字が9割以上という風な説明がございましたが、本校のその数字は、県と比較するとマイナス15ポイントとなっております。自己肯定感、自尊感情が少し低いような傾向にあります。どうせ僕なん

か、生まれてこなければ良かったというようなことを言う子も少数います。ですが、同じアンケートの夢や目標を持っている、については県平均よりも高くなっている状況です。象潟小学校では毎年4月に、児童玄関に夢を書いた夢カードを掲示しているのですが、それも要因ではないかと思っています。地域の方々の学校に対する意識は高く、協力も惜しまず、どんどん学校に入ってきてくれます。今年度は3年ぶりに郷土芸能鑑賞会を開催することが出来ました。金浦神楽も来てくれました。文化の日にも関わらず、金浦小、金浦中の皆さんにご苦勞をお掛けしました。どの学校もやっているかもしれませんが、ジオパーク巡り、にかほジオ学習、米作り、算数や家庭科のゲストティーチャー等の協力、必修クラブの講師、読み聞かせ、福祉体験学習、仁賀保高校の生徒との交流等、惜しみなくご協力いただいております。1月6日には有限会社りす 藤本智士さんの講演を聞く機会がありました。皆さんご存じのとおり、池田修三さんを全国に知らしめ、いちじく市を企画・運営してくれた、のんびりの編集者です。

にかほ市の象潟には鳥海山、中島台、元滝の伏流水、温水路、日本海、鮭養殖場、おいしい牡蠣、各種企業や商店、施設も含め校外学習で街探検できるところ、ジオ探検できるところがたくさんあります。今年度象潟小学校は、賢く豊かに逞しく、を全校の合言葉にして様々なことに取り組んで参りました。この3つの言葉は、象潟小学校の校歌「笑顔輝く」でも歌われている言葉です。3月末まで合言葉を意識して教育活動を推し進めていきたいと思っております。

●伊藤副委員長 ありがとうございます。続きまして、仁賀保中学校の阿部先生からお願いします。

●仁賀保中 阿部校長 前回の会議でメリット・デメリット等は話し合われた通りですので、私の方からは、仁賀保中学校は平成21年12月に新校舎が完成し、平成22年4月より釜ヶ台中と統合して新生仁賀保中学校がスタートしましたので、その平成22年4月と令和4年4月の生徒数を中心にお話ししたいと思います。平成22年4月の段階で1年生104名、2年生113名、3年生141名の合計358名でした。令和4年はマイナス142名、現在216名の生徒数です。1年生67名、2年生67名、3年生82名で全学年マイナス30～50名ほどと、明らかに人数が減っている状況です。学級数は、平成22年4月は1年生3学級、2年生4学級、3年生4学級、特別支援学級2学級の全13学級でしたが、令和4年はマイナス4学級の9学級になりました。1年生2学級、2年生2学級、3年生3学級、特別支援学級2学級で学級数も明らかに減っている状況です。教職員数は、平成22年は41名、現在は38名です。PTAの会員数は、平成22年は332世帯あったものが141世帯減少し、現在191世帯

になっております。

部活動数は平成22年4月には14ありましたが、令和4年4月はマイナス1の13となっています。全体の人数が減った割に、部活動は減っていないということから、1つの部活動の人数が減っていることで、残念ながら単独で大会に出られないものもある、ということが現状です。部活動への加入状況も、平成22年では運動部に80.2%の生徒が入っていたものが、令和4年では56%と、マイナス30%になっており、文化部は15.3%だったものが27%になっています。文化部は割合としては増えています。無部は平成22年には4.5%だったものが、現在17%とプラス13%になっています。この無部の中には、学校の部活動には入っていませんが、地域のクラブチーム等に入っている子が結構いるということでした。先ほども申し上げたように、顕著なのは部員数の減少で、サッカー部は秋の大会に合同チームで出場しました。野球部に関しては9名減となるため、来年8名入部しないと単独チームでは出場できなくなります。吹奏楽部は1年生3名、2年生3名、合わせて6名という状況です。

このように人数が減ってきている状況で、学校経営として今年1年何を頑張ったかと言いますと、やはり、地域に貢献できる生徒を育てたいということで、地域の力をかなりお借りしました。にかほ市に若者100人会議というのがあるのですが、その方々に学校に来ていただき、色々お話を聞いたというのが一番大きな実績かと思えます。3年生の総合的な学習の時間で実施し、そのお話を聞いたうえで、3年生がにかほ市に何か提言できることはないか、ということを一人生徒ひとり考えて、それを発表の場で提言しました。それから、コロナ前には実施しておりました職場体験も今年度復活しました。旧仁賀保町の各事業所に子ども達が出向いて行って、自分の将来のことを考えるというような学習になりました。いずれ、人数は少なくとも故郷を愛する気持ちを育てていきたい、という風に思っておりますので、今後もこのようなことを継続していきたいと思えます。

●伊藤副委員長 ありがとうございます。学校の現状について、ご質問等はありませんか。

(なしの声)

●伊藤副委員長 質問等ありませんので、次に進みます。案件2) グループ討議に入ります。それでは各グループで討議を始めてください。

グループ討議の概要

Aグループ

- 生徒数の実績を見るとこれ（統合）しかないと思う。
- 学校として停滞しないためには、中学校では1学年3学級は必要。
- 教育長から「にかほ市としての一体感」という言葉があり、この言葉から将来的には（統合は避けられない）と思った。
- 象潟、金浦、仁賀保地区に1小学校、1中学校ということは、小学校も中学校も学級数は一緒になるのではと思い、少し違和感がある。（小学校は2学級、中学校は3学級というのは合わないような気がする。）このまま、この適正規模を使って行って不具合はないのかなと思った。
- 中学校で1学年3学級ないと、免許外を解消できないからだと思う。金浦中学校は免許外の先生がいる。
- 教員の数は学級数によって決まる。不足した場合、「免許外申請」や「兼務発令」で補っているが、担任を受け持っているケースもあり、スケジュールの調整が難しい。
- 1学級あたりの人数については議論できないのか。
- 人数は法律によって決まっている。仮に1学級の人数を少なくして、学級数を多くしたとする。法律で決まっている学級数を超えたとき、県から配置される先生はいない。超えた分の教員の給与は市が負担しなければいけないという問題が発生する。
- 1学級の人数が極端に少なくなると、複式にしなければいけないという問題にもつながる。
- 複式学級は、1つの教室で2つの学級が勉強する。（教科書も2つ）上の学年に教えているときは、下の学年は自分で問題を解くという時間を交互に過ごし、体育は1～3年生、4～6年が一緒。そうしないと個人競技以外ができない。（スポーツもやれるものが限られてくる）
- 適正な学級数は、何年の範囲を見て算出しているのか。法律などの制約条件と現状（推計を含む）をぶつけたときに単独で学校が成り立つのか、統合でなければいけないのかがおのずと見えてくると思う。要するにシミュレーションが必要。シミュレーションから見えてくる財源の問題、課題などを仕分けしながら議論をしていけたらと思う。
- ただ漠然と学級数や人数について話し合っても、解決の糸口が見えない。具体的な数字があって、それに対応しようとしたときに、必ず課題が付いて回る。アンケート中の「ああしたい・こうしたい」を肯定すると、無理が生じてくる。現実との狭間に置かれるのが、人口減少なのかなと感じる。
- 部活動が単体で成り立たない。

- 部活動と学校の在り方は切り離して考えた方がよいか。
- 土日（休日）の部活動は、いずれ地域に移行していく。平日に関しては、結論が出ていないため、しばらくは学校単位になると思う。そうでなければ、市全体で統合型のスポーツクラブにし、中体連が認めれば、そうした形もあると思う。
- 子どもの気持ちを考えたとき、「この部活はこの学校にしかないから」「人が少ないから」という様々な障害が出てくると（子ども達がかawaiiそう）。子ども達に活動しやすい環境を作ってあげられる事と統合との関わりは大きい。
- 象潟のサッカースポ少は、金浦と合同チームを組んでいるが、金浦の子どもが0人で、チーム名は象潟・金浦サッカースポ少となっている。中学校の部活動だけでなく、小学校のスポ少にも影響が出てきている。
- 部活に2つ入るのはダメなのか。
- 厳密に言うと中体連の決まりでダメ。すべて登録制のため。
- 野球とかサッカー部を引退した後に文化部に入って、全国大会に行くのはいいか。
- 全国的にある。昼休みだけ合唱部とか、秋田市あたりはあるかも知れない。都会に行けばもっと…。
- もう、部活という形じゃないのかなと思う。いずれは、どの競技も市で1つずつになっていくのかも知れない。
- 小中一貫は、違った枠組み、適正規模があるのか。市全体を一つの枠にあてはめるのではなく、どこか一部（例えば金浦）の小中学校を一貫校に、定員を30人として、選択できるとか。バランスをとりながら、その中で先生の枠を決めていくように工夫できないのかと思う。
- 希望学区制は既に、埼玉県や東京都でやっているところはある。実施するためには、相当前から進学する学校を決めなければならない。教員の定数があり、人事異動に絡んでくる。また、希望学区だと、学校が成果主義に走るような気がする。
- 例えば、金浦小中学校を単純に一貫校にしたとしても、人数が減っていくことには変わりないため、統合を伴っていないと難しいと思う。
- やはり、複式学級が発生する前ではないか。中学校は、少し時間がありそうだが、小学校は待ったなしの状況。統合する場所をどうするか、既存の校舎を使うのかといった問題もある。そうしたことも含めて、計画を立てていかなければいけない。校舎を建てるにしても、設計から2年はかかると思うので。
- 家は横根にあり、子どもが院内小に通っているが、小出の方の中には、金浦が近いから（金浦小に通う）という選択肢もあるかも知れない。単純に距離だけで決まらないと思うが…。
- 地域間交流の面で、学区と大人の集合体がイコールだと、親同士のコミュニケ

ーションも活発にできると思う。全く違うと大変だと思う。

→平沢と院内の子は保育園が一緒。小学校にあがるときに別れて、中学校でまた一緒になる。仁賀保地域には、認定子ども園仁賀保と仁賀保保育園があって、院内小と平沢小が統合した場合、学区と一緒になる。

→卒園のとき、子どもが泣いていたのを覚えている。「中学校で会おうね」と子ども達同士で声を掛け合っていた。

→園にいるときから、そういう関係性ができているという事。

○小学校の推移を見れば、令和17年には、院内小学校47人。学年平均すると7～8人。これほどの人数になったとき、どのくらいまで学級活動ができるのか、どんな影響が出てくるのか考えないといけない。令和8年は入学者が6人の推計だから、小学校は早々に。子ども達に不便な思いはさせたくない。

○救いなのは、保育園が一緒だということ。子ども達にとっては、それほど抵抗ない面もあるように感じる。私も上浜で経験しているのでよくわかる。確かに寂しいと思った。

○仮に、院内小と平沢小が一緒になった場合、統合する場所の候補地はあるか。

→統合する場所等は、未定。

○統合する場所にもよると思う。みんな平等にはいかないと思うが、通学や送迎の事を考えると、せっかくだから…という気持ちはある。

○ハザード的なことを言えば、平沢小は、町の中に入っていった方が良いと思う。子ども達を守っていくというのは、災害からも守るということ。立地を変える事も検討し、統合していくのが理想。

→そうしたことも検討した結果、場所を変えるのがタイミングとしてもベストだと思う。

○2校が統合し、コストメリットが出てくる。そうした部分でもメリットとデメリットを出しながら、試算していくのが理想であるし、命は何にも代えられない。

○平沢小は高台にあり、津波は大丈夫だと思うが、孤立してしまう可能性はある。

→象潟小も避難訓練するときに屋上へ逃げている。

→東日本大震災のように、様々な条件が重なった場合、決して安全とは言えない。

○金浦は1クラスしかない。減っていく一方で、今後も減少は避けられない。「複式学級」という言葉を今日、初めて聞いた。私の主観で申し訳ないが、教育の質はどうしても落ちてしまうと話を聞いて感じた。複式になるところは、統合するべきなのかなど。

○地域に学校を残したい気持ちはあるが、子どものことを思えば、自分の住んでいる地域と違う学校に行くのは仕方がないと思った。

○統合後間もない頃は、馴染めない子、適応できない子がいたという校長先生の話聞き、自分が小さい頃と比べた。今は、ちょっと叩けば心が折れてしまうよ

うな子が多い気がする。これからの子ども達には、そうなって欲しくない。

○正直、今も（統合すべきか）迷っている。どれが正解かは分からない。少子化の流れの中だから、適正化は仕方がない。しかし、1学級あたりの人数など、法律が変えられるようであれば、変えていって欲しい。

○統合のタイミングは、今でも厳しいと思う。金浦中は学校全体で100人を割っている状況だから。

○小学校と中学校、同じタイミングで統合という事も可能性としてあるか。

→1学年20人くらいのところは、人数は少なくても目が行き届きやすいが、全員が同じレベルに合わせていくのが大変だと思う。人数が少ないから逆に揃わない。クラスとしての一体感は少ないように感じる。

→人数もいずれ10人単位になっていくだろうから（早い方が）。

○金浦の子ども達は、一人ひとり大事にされすぎて、人の中でもまれる経験がないので、この後やっていけるかと心配になる。

→逆に、高校に行ったときにそうなるよりも、中学校でそういうチャンスがあった方がいいという捉え方もできる。

○統合するまでに、学区外の子とどれくらいの期間、交流活動できるのか。統合してから、学区外の子と初めて会うのではなく、顔を見知っていて、「久しぶりだね」という関係が築ければ、今心配されていることは緩和できるのでは。

→市内の施設が交流の場だとか、そういう役割ができればと思う。

→上浜と上郷と象潟とが統合するときは、交流学习は結構あった。

→象潟小は2年くらい交流していた。

→交流して関係を築いていくことは、大事だと思う。

○金浦中は、人数が少ないため、修学旅行の一人当たりの単価が高くなってしまふ。今は、学校からお願いして、業者に見積を出してもらっている状況。人数が多ければ2～3者からの見積もりを比べ、少しでも安いところに決めることができる。学校行事にも影響が出ている。

Bグループ

- 自分の子どものことを考えると、小学校のうちは統合しないほうが良いなど思う反面、将来的な人数をみたときに、増加は見込めないことは予想される。結論から言うと、にかほ市全部で検討したほうが良いと思う。
- 自分の子どものことを考えるよりも、その先を考えて、今、手を打っていく必要がある。

- 今、私が抱えている不安よりも、この先10年後の方のほうが、子どもに対しての不安が大きくなっていると思う。
- 将来、未来のことを考えて、検討していくことが必要。
- にかほ市全体で、小学校1校、中学校1校までしないと成り立たないのではないかな。
- 大規模校のデメリットよりも、小規模校のデメリットがあるのでは。
- 感覚だが、自分たちより下の世代は、3町というイメージはないようだ。違和感がない。先輩たちは、3町の枠を重視する傾向あり。
- 長期的な視点で考える仁賀保高校の在り方
にかほ市唯一の高校として、とても大事だと思う。もっと育てないといけない。あまり積極性がない子が多く、また課題を持つ子が多い。
地域の学校として、応援し、育てたい。
- 仁賀保高校の校舎が老朽化しているので、にかほ市の学校が空いていくとすれば、そこに入れたらどうだろうか。
- まちづくりも視野に入れて、学校の在り方は考えないといけない。
駅からのアクセス、若者支援住宅計画関連。
- いくらスクールバスを導入しても、部活問題もある。
- タイミングが遅い。
スポ少や部活が合同になって、子どもの減少は前からわかっていたこと。
- 個人的意見は、地域社会とのつながりからも学校を残したいが、将来を見据えるとひとつと思う。
- なんらかの形で、小・中・高連携できないだろうか。
- 平沢、金浦は小中一貫校対応できるのではないかな。
- 今の生活を維持するので精一杯だが、未来の子ども達の立場で考えることが大切だと思う。
- R9になると、市内小学校1年生すべて1学級になり、市内1校として、総数を35人で割ると3学級となり、適正の学級数2から3に、ちょうど、はまる形になる。
- 人数が多いと、さまざまなタイプの子に接することができるので、自分と相性のあう子に出逢える確率が高まる。
- この数字から見ると、にかほ市1校かと思う一方で、以前いた学校で、地域に学校行事を開いた際、体育館がお年寄りでいっぱいになった。そういう地域のパーツがなくなったら…。今後、そのような場所を地域の方々へどう提供していったらよいのか。学校だけが地域に元気を与えるものではないけれど。
- コロナ禍で、地域のまつりが中止になった。まつりをきっかけに、挨拶を交わし、関係性がよくなる機会だったので残念。

- この委員会で意見を言うのは、本当に難しい。現状なら **OK** だが、子ども達の急激な減少を目の当りにして、子どもの小さい保護者の意見をもっとよく聞いて、取り上げたほうがいいのではないかと思う。
- 部活動は、子どもが選択している以上、合同チームの制度があるので、最大限の希望を取って、活動している。
- 今後、スポ少、部活は、地域移行になるが、より広域的になったとき、地域行事へ参加させたくても、部活等との兼ね合いでより難しくなる懸念あり。
- 若い世代の保護者が大人数で切磋琢磨して広域的にやらせたいとすれば、統合しか道はないと思う。
- 2学級存在するのであれば統合せずとも **OK**。1学級で人間関係がこじれなければよいが。
- 院内と金浦はちょっと違う。子どもの数の推移をみると、R11、17に変動が大きい。いきなり、市内1校ではなく、2段階で考えるべきではないか。人数だけの問題ではなく、子ども達は、学校だけでなく、家庭と地域、みんなで育てていくもの。
- 中学校は複数学級が理想。小学校は、通学の問題があり、遠いだけで学校に行くことが億劫になることもあるし、人間関係で行きにくくなったときにさらに拍車がかかりそう。
- 仁賀保高校に3町の壁はない。
- 小学校がなくなったら、地域行事ができなくなるわけではない。
- 通学の心配。
- 小学校2校、中学校2校と最初思ったが、中学校は思い切って1校にまとめたほうが、生徒数が多ければ、教職員の配置も多くなるし、さまざまな先生との関わりができる。
- 統合の時期とか、何校にというのはわからないが、今後決まったことに対してやり方を決めていくわけだが、考え方として、今ある課題をどうこうというよりも、今ない未来に向けて、にかほ市の魅力を再構築していかないといけないと思う。経済的、社会的にも「にかほ市っていいよね」という社会を作っていないといけない。デザイン構築していくには、地域との関係性が大事になる。それを解決できるのが、テクノロジー。今、ZOOMで非対面になったが、仮想空間、メタバースとか、教育現場から取り入れて、学生と地域一体となって課題を解決する、「課題解決」を魅力にしてやっていく、やり方じゃなくて、考え方。どうやって作っていくかを考える。これからのにかほ市、社会の魅力づくりにフォーカスして作っていったほうが良いと思った。

C グループ

- 小学校は各地区に残したい。ただ、中学校は部活動等が1校で成り立たないことを考えると、ひとつにまとまったほうがいいのかと思う。
- 建物を維持していくとなると、財政的にもまとまったほうが良いと感じた。
- 自分が通っていた学校は1学年26人で少ないと言われており統合した。今後生徒数が1学年15人になるという現実を見せられ驚いている。今後の人数の見込を少しでも変えられる方策があるとなれば、学校だけでなく、にかほ市そのものの存続に関わる場所なので考えていかなければならない事案。
- 子ども達の将来を見据え、大人も含めたにかほ市全体に関わる問題に取り組む提言にしていきたい。
- 適正化を検討すること自体は必要なこと。裏付け、後ろ盾、バックアップを強めたいという考え方もあってこの委員会があると思う。個人の意見をぶつける場ではないと思っている。
- 2040年には、小中学校1校という予測が出ているので、人数が少なくなることを見越して、学校の場所だとか検討を始めたほうが良いと思う。
- H30象潟小統合のとき、一クラス10人くらいの上浜小から、1学年3クラスの学校へ編入した経験あり。廃校に関して、かなり地域も名残惜しさはあったと思う。地区から学校がなくなるということは、子ども達が集まる場もなくなるので、地域の方々との接する場も減る。ただ、少し時間が経って、今考えれば必然だったのかなと思える。当時、親として感傷もあって、非常に淋しい思いもあったが、今となればやむを得なかった。
- 子ども達の数が急激に増えるわけでもないし、校舎の維持管理、部活動の存続を考えると、適正化を進めていくことは、必然なのかなという思いはある。規模、時期もあるわけだが、将来的に小中1校ずつ将来的には見えてきている。
- 中学校の3学級は、現実的なのかどうか。保護者のなかには、3学級ないから、中学校は1校にまとまるのかという捉えをする方もいるのではないか。
- 学級数などについて適正な数字を示すことで、押し付けるわけではないが思わせてしまう危険性があるのではないか。現に、中学校だと5学級よりも4学級がやりやすい場合もある。時間割編成で2学級ずつ活動できるなど。県の中学校の少人数学級だと5学級にできるところを4学級で運営している学校もある。
- 適正数を示すと、学級数から学校数が透けてみえる。だから、各地区にはおけない。1校なのだと。
- 基準として適正化の数字を示すのではなく、アンケートの結果として示すの

ではどうか。

- アンケート結果から、現中学校は、多くて2学級編成なのに、3学級以上を希望する保護者が多いのはどう捉えたらよいのか。
- 現状に満足不満足というよりも、保護者が、自分たちのときは、3～5学級いたので、これくらいいたほうがよいという捉え方ではないか。
- 複数学級あると、クラス替えの楽しみがある。ただ、多人数になるとやかましきもある。
- 自分たちは、35人学級で二クラスだった。十数人で、一クラスと言っていいのかと感じてしまう。こういう学校で、どういう人づくりができるのか。にかほ市は、人づくりとまちづくりはセットだと思う。適正化を検討するのは当然のことだ。
- E小だと、R8は新一年生が6人。この少人数で、体育とか発表会とか成り立つのか。成り立たせることができるのか不安というか疑問がある。
- その人数で工夫しながらやるしかない。例えば、教科、行事によっては複式でやるとか進め方を検討しながら。
- 通学区域の変更、弾力化は、市内学校の取り合いになるだけで、問題解決にはならない。
- 小中一貫校の導入については、有意義な教育手法だと言われているが、小規模校の解消につながるものではない。
- 部活が地域移行になるが、あくまで地域単位なのか。
- 地域移行をマスコミが騒いでいるが、思ったほど進んでいない現状。いちばんのネックは、指導者の確保。休日だけでも地域移行へ。最初は、文部科学省でも2025年までは必ずとしていたのが、最近トーンダウンしている。ちなみに、来年度から中体連の大会にクラブチームも参加することができるが、基本的には本荘由利地区の大会に出られるのが、本荘由利の生徒が在籍しているクラブチームのみ。例えば、ブラウブリッツは秋田市の大会には出られない。本荘由利在住の子は、秋田市の大会には出られない。そういうルールができた。どこまで地域移行が進むのかは、疑心暗鬼である。
- 小中一貫校は、一時しのぎでしかない。合併せず、自治体単独で残っている井川町は、そのまま維持している。
- 基本方針の骨子(案)をまとめるにあたり、単語の使い方を考える箇所がある。例えば、適正化を検討する「範囲」を「対象」にしたらどうだろうか。

- 伊藤副委員長 最後に見山先生より講評をお願いします。

- 見山先生 グループワークお疲れ様でした。最初の講演でもお話しさせてい

ただきましたが、これは何のための作業なのか自分なりに考えながら、また冒頭の教育長のお話も踏まえながら聞いていて、この会にはかほの未来を担う子ども達のために、教育環境をどうやって整備していくべきなのかという話をしていのだと感じました。タイトルだけ見ると学校環境適正化という難しい言葉ですが、この言葉の意味することは、今申し上げた通り、子ども達のために教育環境を整備してあげることだと思います。教育環境の整備とは何だろう、と考えたときに、今日の皆さんのお話を聞きながら、子ども達に多様な選択肢を示してあげることなのかなと思いました。選択肢とは、言い換えると可能性だと思います。色々なものに触れる子ども達は勝手に学んでいくと思うので、触れる機会をどれだけたくさん作ってあげられるか、その提供されただけの選択肢の中で、子ども達が選ぶことが大切だと思います。

Amazon の創業者ジェフ・ベゾスが、才能は簡単なものであり、一番大事なものは選択をしていることだと言っていました。プリンストン大学の卒業式で卒業生に向けて、自分たちはこれまでどういう選択をしてきたのかということ、これから君たちの人生は選択の繰り返しなんだよ、という話をしたそうです。選択というのは何から決められるのかということ、経験値からだとは私は思います。だからたくさん経験を積ませてあげて、可能性を示してあげることがとても大事で、そういう場を提供してあげることがとても重要なのだと改めて感じました。これから目指すところは何かということですが、これから子ども達が減っていくとなると、地域の中でどう育てていくかという視点がとても大事になってきます。今まで以上に、地域の人たちが学校と一緒に子ども達に協力していく、という地域の連携がすごく重要になってくると思います。

ここで多様な方々が集まって話をしている機会、この会議自体も、未来に向けての重要な場になっているのではないかと改めて感じました。1つのグループでは高校も含めた話をしていました。今、文部科学省では高校と大学が連携する、高大接続した高大連携ということをやっておりますが、地域連携においては小中高の連携が大事だと思います。先ほどのグループワークで、仁賀保高校の生徒が参加する授業があるという話がありましたが、高校生が小学校、中学校に行ったり、中学生が小学校に行ったりする、小学生が中学校、高校に行ったりするという学びを向上させていくと、地域愛のようなものが芽生えますし、進学した際に知っている人がいるなど、そういった人間関係も醸成できるのかなと思い、小中高の接続連携のようなものとしても面白いと思います。

私自身、外部の人間として関わらせていただいて、外部からも色々提供できると思っております。私は TDK デザイン(株)と一緒に事業をしており、仁賀保高校情報メディア科の1年生向けに授業をしています。それは産学官連携で行っているのですが、今後も続けていきたいと思っています。他にも、私の大学の授

業で、にかほ市に対する地域活性型提案をやっておりまして、3月に自分が受け持っている大学生を14人ほどにかほに連れてきて、市内を探索させるという計画をしています。今まで実際に訪れていないので来てみたいということで、3月6日から9日ににかほに来る予定です。今回の取組み1回で終わらせるつもりはありません。今回は時期が悪く難しいのですが、来年度以降はできれば、東京の大学生がにかほ市の小学校、中学校、高校を回る機会を作っていきたいなど考えております。その継続的な取り組みとして、私がガイドとしてきております。それに関連して、仁賀保高校の生徒会長が4月から私のいる大学にいらっしゃるので、3月から一緒になって交流を始めてもらおうと思っております。そういったことを始めていくので、私の方からもこういった事業に活用していただきたいと思っております。

ウクライナの話であれば、本部がフランスにある国際NGO世界の医療団の日本理事もやっておりますので子ども達にそういった話もできます。デザインの話であれば、あきたびじょんのデザインを作った、梅原真さんという高知県在住のデザイナーともつながりがあります。私が外にいることによっていろいろな人たちを連れてこれますし、今はオンラインのツールもあって外部の人たちとも簡単にやり取りができますので、話を聞いていただけるような場をどんどん作っていきたく思います。私が外部の人間として遠目から見るのではなく、中に入って皆さんと一緒にやっていけたらと思いますので、何かあれば遠慮なくおっしゃっていただきたいです。

●伊藤副委員長 ありがとうございます。本日の案件はすべて終了しましたので、進行は事務局にお返しします。

●佐々木班長 次回の開催予定等について事務局からお知らせします。

●今野課長 本日はありがとうございます。次回の会議ですが、現状説明を金浦小学校、平沢小学校、象潟中学校からお願いします。

●佐々木班長 以上を持ちまして、第3回学校環境適正化検討委員会を終了します。